

研究課題：静岡県立静岡がんセンターにおける口腔・中咽頭がん患者に対する周術期の専門的口腔ケアによる口腔内細菌の経時的変化と術後合併症との関連性に関する前向き研究

研究者名：大田洋二郎¹⁾、上野尚雄¹⁾、大曲貴夫²⁾、江口徹³⁾、犬伏順也³⁾、齊藤徹³⁾、藤沢考一³⁾、西田美恵子³⁾、林よし子³⁾

所 属：¹⁾ 静岡県立静岡がんセンター歯科口腔外科、²⁾ 静岡県立静岡がんセンター感染症科、³⁾ サンスター株式会社研究開発部

【抄録】

口腔・中咽頭・上顎癌の再建手術によって生じる創部感染リスクを抑えるために、近年周術期の口腔ケアの重要性が認識されつつある。平成 17 年度厚生省がん研究助成金大田班は口腔ケア介入の有効性を調べる後ろ向きケースコントロールスタディを行い、口腔ケア施行群が術後合併症の発生率、経口開始までの日数、在院日数の項目において有意に良好であり、また多変量解析により口腔ケア介入が術後合併症の減少に効果的であることを明らかにした。

しかしながら、口腔・中咽頭がん患者に対する周術期の専門的口腔ケアによる口腔内細菌および創部細菌叢の変化や関連性についての網羅的な細菌検査に関する報告は少なく、また残存菌や歯周状況と口腔内環境の関係や口腔内細菌との関係、さらには合併症軽減に寄与する機序はいまだ明らかにはされていない。

本研究口腔・中咽頭再建患者 6 名に対し口腔ケア介入をおこない、経時的な口腔内診査と口腔内細菌叢を調査し、口腔環境と口腔内細菌との関係や周術期の専門的口腔ケアが口腔環境に及ぼす効果を明らかにすること。そして、その効果と口腔・中咽頭がん患者の術後合併症の発生率との関連性を分析することで、専門的口腔ケアが口腔内環境に及ぼす具体的効果や、術後感染リスク低下の有効性を実証することである。

本研究の結果、細菌検査により、PMTC により、術直前の洗口吐出液 (5/6 例) および患部拭い液 (3/6 例) の全菌数が減少し、洗口吐出液の構成細菌比率のうち、球菌の増加と運動性菌やスピロヘータの減少が認められた。頭頸部癌再建手術の周術期の PMTC は、口腔内の総細菌数を減少させ、さらに球菌の比率に影響を与え、口腔内の環境が球菌主体の環境、すなわち口腔清掃度が良好な状態に改善することが示唆された。また検出菌種は、術直前よりも抗生物質投与後の術 1 週間後においてさらに減少することが確認された。また PMTC 前と術直前に同定された菌種は、重複するものが多かったが、術 1 週間後では、検出数は少ないが PMTC 前や術直前に見られなかったグラム陰性桿菌種が検出されるなど、細菌叢を構成する菌種に大きな変化が認められた。今回の検討症例 6 例には局所感染を起こしたものがなく、検出された細菌と創部感染を起こす起炎菌との関係を明らかにすることはできなかったが、こうした口腔内細菌種の変化の特性と起炎菌との関係が解明できれば、より効果的な抗生物質の投与が可能になると考えられた。